

研究報告書レイアウト（参考）

（具体的かつ詳細に記入すること）

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）研究事業）
（総括）研究報告書

神経難病における中枢神経感作の
メカニズム研究とアンメットニーズに応える革新的治療法の開発

研究代表者 | 眞野 智生 大阪大学
大学院医学系研究科脳神経機能再生学 特任講師（常勤）

研究要旨

脳科学の手法を用いて神経難病のアンメットニーズである異常感覚や痛みを解析し、中枢神経感作のメカニズムを解明するとともに、実際の診療状態を調査する。

齋藤洋一・大阪大学，望月秀樹・奈良学園大学，柴田政彦・大阪大学，細見晃一・大阪大学，宮井一郎・森之宮病院，藤村晴俊・刀根山病院

A．研究目的

神経難病の異常感覚と痛みの中心神経感作のメカニズムを明らかにする。実際に神経難病を診察している医師のニーズ、考え方を調査する。

B．研究方法

自主臨床研究にて、神経難病患者に対する電機生理学及び脳機能画像を用いた評価を行う。また、アンケート調査を行い、診療実態を調査する。

（倫理面への配慮）

臨床研究は、「ヘルシンキ宣言」および「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守して実施し、大阪大学倫理委員会の承認を得ている。

C．研究結果

自主臨床研究「神経難病における疼痛に特徴的な客観的指標及び運動感覚閾値の変動を基盤とした中枢神経感作の研究」は、平成 30 年 12 月現在、パーキンソン病 5 名、スモン 2 名の検査を完了している。また、過去のデータを診療情報より抽出する作業を実施している。

2018 年 3 月に、日本神経学会専門医 5470 名に対してアンケート用紙を送付したアンケートを回収，集計を行い，論文文化を進めている。

D．考察

今年度中に被験者を増やし，多数例での解析が望める。また，アンケート調査の結果を解析し，臨床現場のニーズを発表する。

E．結論

概ね順調に進行している。

F．健康危険情報

特になし

G．研究発表

1. 論文発表

1: Hashizume A, Mano T, et al. Efficacy and safety of leuprorelin acetate for subjects with spinal and bulbar muscular atrophy: pooled analyses of two randomized-controlled trials. J Neurol. 2019 May;266(5):1211-1221

2: Akhtar RS, Mano T. High serum neurofilament light chain predicts a worse fate in early parkinsonism. Neurology. 2019 Mar 26;92(13):595-596

2. 学会発表

An evaluation of repetitive transcranial magnetic stimulation effectiveness on cardinal and eye movement control of patients with Parkinson's disease (ICCN2018)

H．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし

2. 実用新案登録 なし

3. その他